

カムチャツカで観察したスミレ属植物

文・写真 山岸 洋貴

それは突然のメールから始まった。そのメールとは、昨年偶然参加させていただいた国後島における植生調査で通訳・共に調査をしてくださった福田さんから送られてきたものだ。内容は要約すると「カムチャツカに行きませんか?」というものだ。実は昨年の調査の際にそのような話が出た。私が行っている *Corydalis* 属に関する研究の一環でカムチャツカに行きたく思っているとの事を福田さんにお話したところ「じゃあ行きましょう!」とおっしゃってくれていた。しかし、そのまま時間が過ぎ、年は新たに・・・その件はどこかに、気がつけば学会準備で忙しくなる3月を迎えていた。この時、既に今年はカムチャツカには行けまいと諦めていた・・・カムチャツカに行くには調査許可などに時間がかかり間に合わないだろうと勝手に考えていたのだ。怒涛のように過ぎ去った3月が終わり一息ついていた4月の頭、久しぶりに頂いたメールが運命のメールというわけである。正直、少し戸惑いもあった。費用はどうでしょうか、その間に予定はあるか・・・、しかし、メールを見た5分後にはすでにカムチャツカに行く決心がほぼ固まっていた。カムチャツカに行けることはもちろん、カムチャツカの植物や事情に詳しい福田さんと一緒に行けるなどとはまたと無いチャンスかもしれないからだ。その晩は憧れの地「カムチャツカ」への思いで体温の上昇を抑えられずに寝つきが悪かった事は言うまでもない。

カムチャツカ上空を行く飛行機の窓から最初に目に飛び込んできたのは、いかにも北の大地を象徴するような雪や氷に覆われたどこまでも続く山脈・・・やはり6月とはいえ、まだ季節は春を迎えたばかりの頃なのだろうか・・・。となると調査は大丈夫だろうか。と不安がよぎった。しかし、空港に降り立つとほんわりとした陽気。どうも標高が低いところは大丈夫そうだ。そして空港まで迎えに来てくれたガイド役のアンドレイさんは優しそう。それも不安な気分を和らげてくれた。



写真1

アヴァチャ川河口付近の湿地に生育するタニマスミレ

カムチャツカ2日目の午前中、私ともう一人の同行者藤原さんとホテル近くの湖へ散歩しに行くことになった。その湖は昨晚 google map で確認していたメドヴェジエ湖である。ホテルから出ると少し緊張感が漂った。というのも私も藤原さんも“スパシーバ”(ありがとう)か“ヤーチャイカ”(私はカモメ)ぐらいしかロシア語を話せないからだ。しかし、特に何事もなく湖畔へ近づくとヤナギやヤマハンノキの林の中に見慣れた植物を見つけた。オオバナノエンレイソウだ。調査対象の植物の1つ。ちょうど開花期を迎えていて、今回の調査の幸先よいスタートとなった。オオバナノエンレイソウを観察しようとさらに林の中

に踏み込むと日本ではまずお目にかかれないだろう光景に遭遇した。それはやや淡い紫色の花をもつスミレ。丸い葉が特徴的なタニマスミレ (*Viola epipsiloides* Á. et D.Löve^{*1}:写真1) だった。

タニマスミレは日本では北海道のごく限られた亜高山帯の湿原にしか生育していない幻のスミレである。このスミレを観察したのは数年前。偶然にも今回の同行者の一人、藤原さんと共に登った大雪山で一度だけだった。日本では、個体数が少なくここまでの集団はお目にかかることはできない。この時、久々の再会に感激もひとしおだったのだが、以後、カムチャツカ調査の際に何箇所かで出会うことになった。そもそもタニマスミレやその近縁種は北半球の亜寒帯を中心に広く分布する北方系のスミレであるため、カムチャツカでは散見されることは驚くべきことではないかもしれない。今回の行程中、この他、アヴァチャ川河口付近の沼やスヴェトロエ湖のほとり、アパチャ近郊のグラッドキー山東方10km、標高520m地点(写真3)で観察することができた。特にグラッドキー山東方10km地点では樹高2m程のハンノキ近縁種^{*2}がパッチ上に林分を形成するような環境で、草原との境界の林縁部のやや湿った所に多く生育していた。カムチャツカにもタニマスミレが生育していることは事前に知っていたが、ここまであちらこちらで観察できるとは実にうれしい出来事の1つであった。

メドヴェージェ湖ではもう1つのスミレにも出会っていた。それはアイヌタチツボスミレ (*Viola*

sacchalinensis H.Boissieu) である。日本では、北海道を中心に本州北部、長野県に分布する。北海道の出身の私にとってこのスミレはわりとなじみのあるスミレだが、津軽海峡を挟んだ青森県では岩木山や黒森山以外で観察したことはない。日本以外ではシベリア、カムチャツカ、千島列島、ロシア沿海地方、中国北東部、朝鮮半島などに生育する。カムチャツカではタニマスミレよりもやや乾燥した草原、明るい林内、高山帯で観察された。平地では北日本でいうとタチツボスミレやオオタチツボスミレの位置にいるイメージにあう。

2日目の宿となったアパチャ近郊の温泉付きの宿泊施設周辺はダケカンバの比較的明るい林があり、林床ではキバナノコマノツメ (*Viola biflora* L.:写真4) が黄色い花をちょうど咲かせていた。このスミレはこれまで何度も観察しているが比較的小さな沢沿いでしか私は観察したことがなかったので、林床にふつうに生育していることに少し違和感を感じた。またさらに前筆したタニマスミレが生育していたアパチャ近郊のグラッドキー山東方10km、標高520m地点の高山草原や少し礫があるような場所にも生育していた。「ところ変わればなのか」、としばらく考えてい



写真2 (上)
グラッドキー山東方10km、標高520m付近の植生

写真3 (下)
メドヴェージェ湖畔の草地に生育するアイヌタチツボスミレ



写真 4

アパチャ近郊のグラッドキー山東方 10km、標高 520m 地点の
高山植生帯に生育するキバナノコマノツメ

た。(帰国後、日本のスミレ(いがりまさし著)に、礫があるような場所にも生育するとの記述を見つけ、ただ単に私が無知だったことがのちに判明。)また、あれこれ調べると北半球にかなり広く分布する事を知った。北米、ヨーロッパはもとより、南はインドネシアにも生育しているらしい。おそらく高山帯に生育しているのだろうが、いやはやどうも長い旅をしてきたようだ。

3日目の朝、小屋の周りを散歩してきた藤原さんが温泉から流れる小川の周りの湿地でオオバタチツボスミレを見つけてきた。デジカメの画面で「これ、オオバタチツボスミレ?」・・・おお!さすが我が友よ。出発

の準備もそっちのけで私も散策に出る。数分もたたないうちにオオバタチツボスミレ (*Viola kamtschadalarum* W.Becker et Hultén^{*3}: 写真5)に出会えることができた。日本では北海道を中心に生育しており、学生時代を過ごした帯広では近郊の湿性林の中でも観察することができた馴染み深いスミレ。全体が大型になり、花弁も大きい。まさにそのままのオオバタチツボスミレが小川沿いに大きな群落を形成していた。その他、アパチャからペテロパブロフク市までの道沿いの林でもオオバタチツボスミレに出会った。おそらく個体変異だと思うのだが、地上茎の分枝が比較的長い茎の上部周辺で生じていたものだった。一瞬、日本では今のところ知床山系でしか報告されていない近縁のタカネタチツボスミレ (*Viola langsdorfii* Fisch. ex Ging^{*3})かとも思ったが、萼や付属体の形はその特徴に該当するものではなかった(日本のスミレ(いがりまさし著)に Becker and Hulten (1928)などに基づく詳しい分類点が紹介されている)。やはりカムチャツカでもさらに標高の高い所に存在するタイプなのだろうか。現在のところ日本唯一の産地として知られる知床と環境は同じなのだろうか。これはカムチャツカを再度訪問するよい課題の1つとして



写真5

アパチャ近郊の温泉噴き出し口から流れる小川沿いに生育するオオバタチツボスミレ
左の小川には温泉水が流れ込み湯気が出ている。



写真6
アパチャ近郊のグラッドキー山東方10km、標高520m地点のハンノキ近縁種林の林床に生育するミヤマスマレ

残された。この他、ミヤマスマレ (*Viola selkirkii* Pursh ex Goldie) を観察した。ミヤマハンノキ近縁種の林床下に生育していた。やや小型だが北海道で比較的良好に見るタイプに感じられた。

カムチャツカを発つ前日、福田さんに案内して頂いて太平洋地理学研究所の Chernyagina 博士の元を訪れた。博士はカムチャツカを中心に極東の植物に詳しい著名な研究者である。幸運なことに彼女から著書 *Catalog of flora of Kamchatka* (2004) を頂いた。日本に帰り、早速スマレ属のページを開いた。カムチャツカで今のところ存在を知られているのは、表1にある9種である。マキバスミレは自生ではないと考え

られ、おそらく帰化したものであろう。それを差し引いた残りの8種はすべて日本、特に北海道に共通して自生する種である。ちなみに千島列島からは約20種、北海道からは約35種が自生する(変種・亜種・品種など含めない場合)。とても広大で未開の地が多いカムチャツカ。今後、新たな種が発見される可能性は0ではないだろう。今回の調査旅行でスマレ属植物が観察できたのはオマケだったのだが、自生種8種のうち5種も観察できたのは非常に幸運であったと思う。普段の行いが悪い私が天気にも恵まれたのは同行した2人の恩人達のおかげか、私にこれから大きな災難が降りかかるのか・・・いずれにしてもカムチャツカのスマレ達に出会えた興奮は未だに抑えることができない。

表1

Catalog of flora of Kamchatka (2004) に記載されているスマレ属植物と本調査で確認した種

学名	和名	2014年度調査確認
<i>Viola arvensis</i> Murr.	マキバスミレ	
<i>Viola biflora</i> L.	キバナノコマノツメ	○
<i>Viola crassa</i> Makino	タカネスミレ	
<i>Viola epipsiloides</i> A. et D. Löve	タニマスミレ	○
<i>Viola hultenii</i> W. Beck.	チシマウスバスミレ	
<i>Viola kamtschadalarum</i> W. Beck. et Hult.	オオバタチツボスマレ	○
<i>Viola langsдорфii</i> Fisch. ex Ging. var. <i>ursina</i> (Kom.) W. Beck. et Hult.	タカネタチツボスマレ	
<i>Viola sacchalinensis</i> Boissieu	アイヌタチツボスマレ	○
<i>Viola selkirkii</i> Pursh ex Goldie	ミヤマスマレ	○

※ 1 *Viola epipsiloides* Á. et D.Löve

タニマスミレの学名あるいは分類に見解の相違、混乱があるように感じる。

Ylist や IPNI では *Viola epipsiloides* Á. et D.Löve を一般的な学名としているが、Flora of Japan などでは、*Viola repens* Turcz. ex Trautv. et C.A.Mey. が用いられている。またカナダなどでは *Viola epipsila* Ledebour が採用されているようだ。

※ 2 ミヤマハンノキ近縁種

Catalog of flora of Kamchatka (2004) では、カムチャツカ半島に生育するハンノキ属が 2 種記載されている。1 つは *Alnus fruticosa* Pall. もう 1 つは広義のヤマハンノキ *A. hirsuta* (Spach) Turcz. ex Rupr. である。*A. fruticosa* は、*A. alnobetula* subsp. *fruticosa* (Rupr.) Raus のシノニムと考えられる。詳しくは観察していないが、*A. fruticosa* の見た目は日本の高山帯で良く見かけるミヤマハンノキに非常に似ている。

※ 3 *Viola kamschadalorum* W. Beck. et Hult.

Viola kamschadalorum W. Beck. et Hult. とする見解と、*Viola langsдорфи* Fisch. ex DC. subsp. *sachalinensis* W.Becker とシタカネタチツボスミレの亜種とする説がある。Ylist ではこの説が採用されている。今回は、Catalog of flora of Kamchatka に学名を従った。